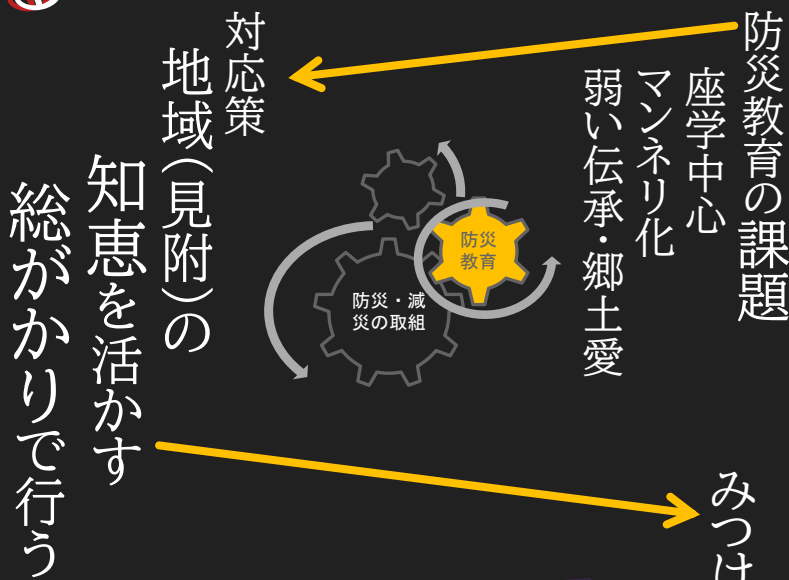


7・13
新潟福島
豪雨災害

刈谷田川決壊 校舎水没



地域に学び 担い手を育てる 防災教育の推進



自分が暮らす見附市をより好きに
負のイメージは持たせたくない
自然に向き合い
共に生きていく担い手に

みつけモデルの開発へ
たちつてとの防災教育

たのしく
自然と接
する活動

ちいきに
根差した
教育内容

つみ重ね
を大切に
した学び

てーまを
決めて
角度付け

とにも
取り組み
総がかり





ちいきに
根ざした
教育内容

7.13水害を上回る 平成23年7月豪雨 流域治水

下流に住む人たちの被害が軽減できるなら

河川改修
遊水地
田んぼダム
地下貯留管



47年間

親も子も演じた

草薙龍

地域の歴史は
治水の歴史



整備された川は

近くて遠い存在

自然とたつぷりふれ合い

仲良くなるところからスタート

全身で地域を感じ
仲間と力を合わせる

たのしく
自然と接
する活動



総合学習

川の恵みと水害の恐ろしさ
自然のもつ二面性

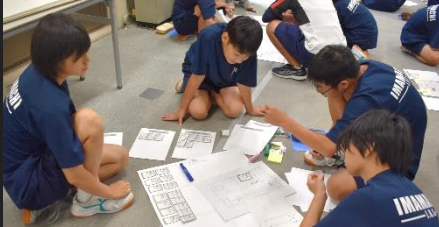
理科や社会科など
様々な教科領域と関連させて



川と自然のすばらしさ
流れ・岩・水性動物等
防災スクール
避難所生活体験
ワークショップ
水害について調べる
施設見学、体験談
水難訓練、Eポート体験
まとめの壁新聞
学習発表 発信
学びを深める交流の場へ

息の長い活動

◎み重ね
を大切に
した学び



防災の必要性への気づき

課題を自分事として

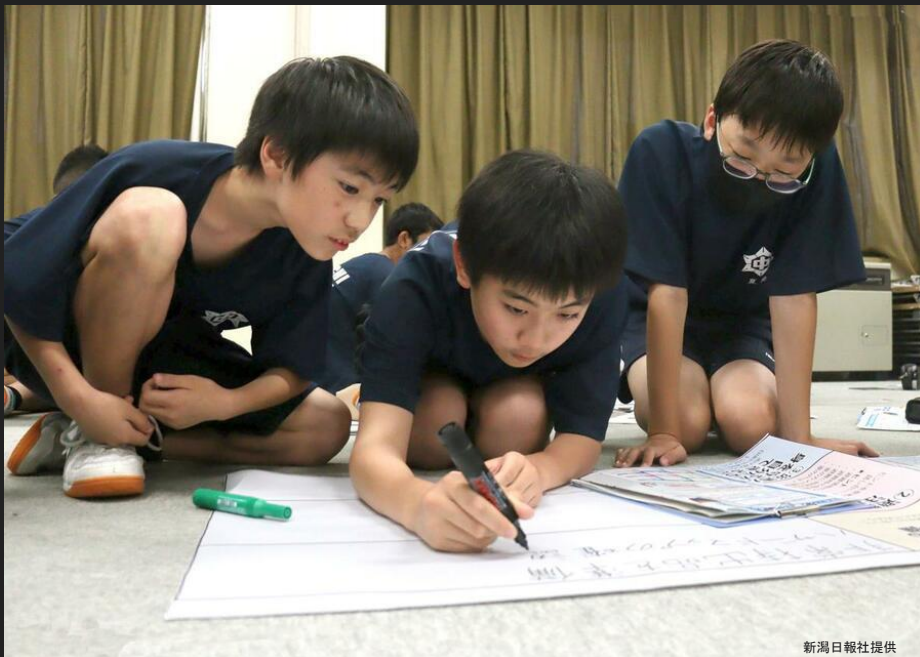


自分や家族の身を守るために
私は何ができるのだろうか

具体的に災害場面を想定
切実な状況の中で

どう判断していくか
予めどのような準備をすべきか
避難所運営ゲーム
マイタイムライン

てーマを
決めて
角度付け



の詳細を改めて理解したり、自分と家族の
な避難行動を考えました。(南中)

大人総がかり

広がる防災教育



とにも
取り組み
総がかり

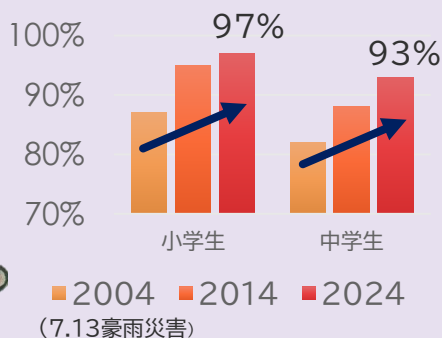
2024年度見附市共通アンケートから

	小学生	中学生
自分の学校のことが好きですか。Yes	90%	90%
人の役に立つ人間になりたいと思いますか。Yes	93%	94%
難しいことでも失敗を恐れずに挑戦していますか。(小3以上)Yes	87%	78%
学級みんなで協力してやり遂げ嬉しかったことはありますか。(小3以上)Yes	93%	93%

災害時に地域のために自分のできることをボランティアとして行いますか。(中学生のみ)

積極的にする。	29%	92%
頼まれたらする。	63%	
しないと思う。	8%	8%

住む地域や見附のことが好き!



- 課題
- 形骸化を防ぎ真正なる学びに
 - 教職員の異動
 - 財政的支援の継続
 - 発信と更なる協働



成果・課題



教育長 渡邊 茂夫

課題と構想

見附市は平成16年7月13日新潟福島豪雨、同10月23日中部地震、平成23年7月新潟福島豪雨により被災しています。

特に、名木野小学校や見附特別支援学校は、平成16年豪雨で1階部分が床上浸水するなど大きな被害を受け、当時、帰宅できなくなった小学生約140人と教職員が、学校で一夜を過ごしました。また、今町、葛巻など刈谷田川沿いの地区も刈谷田川の破堤により度重なる被害を受けてきました。

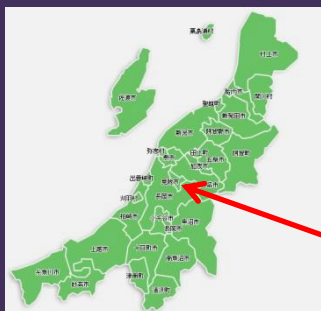
見附市では、従来より、地域に根ざした環境教育に取り組んできましたが、川の楽しさや、自然の恵みを知るという視点からの活動に偏る傾向がみられました。そのため、自然のもたらす災いの厳しさを正しく知り、逞しく生きるスキルを学び、人々の絆、地域に育まれてきた災害文化などにふれ、自分の生まれ育つ地域を見つめなおし、その地域を愛する気持ちを再確認させる必要があると考えました。

また、市内の各校においては、これまでも時間帯、場所、季節などの変化に応じた多様な状況を想定して避難訓練を実施したり、講師を招聘して講習会を行ったりするなど防災教育に取り組んできていました。

しかし、平成16年新潟福島豪雨災害を契機として、身近な河川における豪雨災害を想定するとともに、学校、保護者、地域、NPO、関係機関等と連携して防災教育を実施することにより、知識やスキルの定着はもとより、地域の自然を知り、地域への愛着をはぐくむことを目的として防災キャンプをスタートさせました。

その後、コロナ禍や社会情勢の変化などにより、学校泊を通して学ぶキャンプ形式から、教科領域の学習と関連させて学ぶ「防災スクール」へと形を変えて今日も継続しています。各学校で取り組む活動は、十余年の取り組みの中で、それぞれの発展の仕方を見せてきており、本資料ではその多様な取り組みの一端を紹介いたします。

新潟県見附市では、平成24、25年度と文部科学省委託事業「体験活動推進プロジェクト（防災キャンプ推進事業）」を実施した。内容は、「地域の自然の二面性（災害と恩恵）を理解し、地域に愛着をもつためのプログラム開発」や、「学校、地域、関係機関、NPO、行政等がパートナーシップを構築する体制づくり」である。

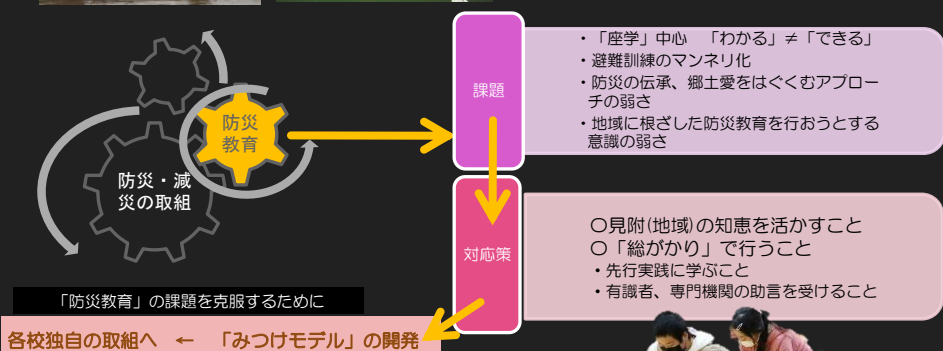


古くから見附市の産業と人々の暮らしを支えてきた刈谷田川。その一方、「暴れ川」として何度も洪水を引き起こし、住民に大きな被害をもたらしてきた。

近年では、平成16年（7月13日）新潟・福島豪雨によって、刈谷田川堤防が決壊し、市内の多くが被害を受けた。それまで40年間は破堤しなかった。（地図①～④が見附市の決壊場所）



見附市立名木野小学校



「たちつてと」の防災教育



見附市の学校教育は「ふるさと見附を愛する子ども、世に役立つことを喜びとする子ども」の育成を標榜し、地域の大人が総がかりで子どもを育てる取組を推進しており、防災教育も同じ方向性を堅持して進めています。

私たちの合言葉は「たちつてと」の防災教育です。防災というと悲しさや怖さなどを感じがちではないでしょうか。私たちは、子どもたちが生まれ成長していく見附市に対して、負のイメージを持たせたくないと考え、自然に向き合い、共に生きていく姿を願いました。

- た** 楽しく自然と接し活動させたい。そして、一人一人が逞しく育っていく教育活動。
- ち** 地域に根差し、地域の特徴や先人の歩みなど、空間的・時間的展望のある教育活動。
- つ** 積み重ねを大切に、発達に応じた段階的な取組であり、一発の花火で終わらない教育活動。
- て** テーマを決めて、科学的な理解、身を守るスキル、絆を深めるなど内容に角度づけた教育活動。
- と** 共に取組み、学校、地域、行政、NPO、関係機関が協働する正に総がかりの教育活動。

見附市内には、「地域伝承を基にした演劇を通し、先人の治水について学ぶ学校」「川の恵みや怖さを学び、防災を自分事として考えるユネスコスクール」「学校運営協議会の中に安全・防災をサポートする部会をもつ学校」等々特色ある取組を行っている学校があります。教育委員会は防災スクール事業を継続するとともに、救命法や親水などの体験を支える外部団体とのネットワークづくりや実践交流などの活動を支援しています。

平成23年7月豪雨

～7・13水害を上回る豪雨と流域治水～

平成23年7月の豪雨では、市内で時間最高雨量68mmを記録しました。これは、平成16年の7.13水害の時の時間最高雨量44mmを大きく上回るものでした。

この豪雨の影響で市内では、床上・床下浸水被害や土砂災害による家屋の被害が出ました。しかし、刈谷田川が越水したり堤防が決壊したりすることはありませんでした。「前よりもいっぱい雨が降ったのに、どうして被害が大きくなかったの？」と疑問に感じた子どもたちは、消防署や市防災担当課職員から教えてもらいました。

7.13水害の教訓から、堤防のかさ上げ等の河川改修や地下貯留管の埋設に加えて、平成23年7月の豪雨で被害を軽減させるのに役立ったと思われるのが、県と市で作った遊水地です。

この遊水地は、刈谷田川の増水時に川の水を水田に一時的に貯めて、下流域の越水を防ぐものです。この遊水地の貯水量は約235万㎡で、ダムが洪水調整をする容量の約60%にあたる量です。今回はこの遊水地一杯に水が入り、洪水調整機能を果たしました。

子どもたちは実際に遊水地を見学し、地域の方からお話を伺いました。遊水地は、下流域の被害を抑えるために施すものであることや、田に泥などが流入して稲に川の水がかぶれば、その年の収穫が危ぶまれることを知りました。そして、「下流に住む人たちの被害が軽減できるなら」と、この地区の農家の皆さん355人の同意を得て実現したことを知り、驚きを隠せませんでした。

(写真)



江戸中期、1797年、小泉蒼軒は地理学者小泉其明の長子として、見附市今町に生まれました。幼いころより父から地理学の教えを受け、父の測量の手伝いをして、越後や佐渡の地図を完成させました



小泉蒼軒は、幅広い知識と総合的な視野から水害・治水の問題をとらえた偉大な“治水の思想家”でした。越後平野では幕府や諸藩の領地が入り混じり、「己が勝手ばかりを成さんとする(自分勝手なことばかりくわだてる)」ために、根本的な治水ができないうことが水害をもたらす原因と彼は考えました。“水道の実理(自然にさからわない河川の利用)”を説く蒼軒の思想は、越後の民間治水論の大きな流れをつくり、のちの運動家にも大きな影響を与えました。

「流域治水」はダムや堤防だけに頼らず、地域全体で水をためて、水害を防ぐ考え方です。そして自分の住む町だけのことを考えるのではなく、あらゆる対策を組み合わせて河川の流域全体の安全を図ります。蒼軒の思想に似ていると思いませんか。



つなぐ

名木野小学校には、47年間も続く「草薙龍」の活動があります。地元神社の祭礼をヒントに劇化したこの取組は、卒業した保護者もその子も経験してきた活動です。名木野小学校の現校舎は、刈谷田川の蛇行を整えた場所に立地しており、地域の歴史は、そのまを力を合わせて乗り越えてきた治水の歴史でもあります。

3,4年生で劇を、そしてその活動を基に5年生は総合学習で、防災について探求的に学習を深めます。

伝統的な劇にアレンジを加えたり、自分たちが学び伝えたいことを織り込みながら活動しています。学習発表会での発表の他にも、近隣の保育園や公共施設への出前公演もしています。



親しむ

刈谷田川は、途中で来伝川、西谷川、塩谷川、稚児清水川、堀溝川が合流します。

川の勾配は、東山丘陵地内では1/100～1/250。新潟平野に入ると1/3000～1/15000と急に緩くなるため、かつての刈谷田川は大きく蛇行していました。

江戸時代には、商品の輸送に多くの河川が利用されていました。この地方にとっても、刈谷田川から信濃川を通して新潟港へ行く交通路は、年貢米や生活用品を運ぶ大切なものでしたが、流れが整えられ堤防が整備されてくると、川は近くて遠い存在になりました。

まずは、川や自然とたつぷりとふれ合い、仲良くなるところから活動が始まります。「川に学ぶ体験協議会」や漁協から大きな支援を頂いています。



総合学習

刈谷田川は近くにある川で、生活に深くかかわっている自然でありながら、子供たちにとっては身近な存在とは言いがたいところがあります。多くの小学校では、理科「流水の働き」や社会「自然災害に備えるまちづくり」の学習などに関連させて、川のことを総合学習として学んでいます。

葛巻小学校では、繰り返し刈谷田川にかかわり、水に親しむとともに、そこに棲む生き物や自然、川とかかわってきた人や生活について関心を広げていきました。子どもは川と向き合い、次第に愛着を深めていきます。

そして、観察・見学・体験を重視した活動から、自分なりの気づきを得ることが学びの出発点になります。

避難所体験として段ボールベッドの組み立て、避難所での困り感を知る高齢者体験、応急手当や負傷者の搬送体験。さらに、身近なものを使った生活用品づくり、非常食づくり等々、多様な活動を外部指導者や保護者ボランティアの協力を頂き実施しました。

防災の必要性に気づき、課題を自分事として受け止めてきた子どもたちは、川の恵みと水害の恐ろしさという自然のもつ二面性から追求を深めていきます。子どもたちは、自分や家族の身を守るために何ができるのだろうか考え、自分の生活の中に積極的に取り入れていこうとします。

自分事へ

中学校では、具体的な災害場面を想定して考え、切実な状況の中でどう判断していくかや、予めどのような準備をすべきかなどについて考える活動を行っています。

今町中学校では、水害時の避難行動に関する「マイタイムライン」の作成を通して、自分の家族構成をもとに、どのタイミングで避難するのか、備えておくべきものは何か等、自分事として課題をとらえています。

また、避難所運営ゲーム(HUG)を活用した学習を行い、避難所運営の大変さと様々な課題に互いに知恵を出し合い、解決していく大切さを学びました。

この取組は信濃川下流河川事務所や新潟県のホームページにも掲載されるとともに、「7.13水害から20年シンポジウム」でも紹介されました。

防災スクールで探求する
避難所生活体験、ワーク
ショップ

7.13水害について調べる
施設見学、体験談
水難訓練、Eポート体験

ふるさとの川と自然の
すばらしさに着目
流れ・岩・水性動物等

- ・まとめの壁新聞
- ・学習発表 発信
- ・学びを深める交流の場

追求

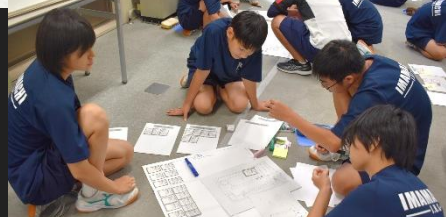


学んだことを壁新聞を書いたり、イベント形式で紹介したりして、校内の児童や地域・保護者に伝えます。そして、「信濃川サミット」で発表したり、「防災みらい会議」で他地域の児童とも共通するテーマで話し合ったりしていきます。一年近くにも及び、息の長い活動です。

総がかり



提供 新潟日報社



自分たちが住む地域の特性や過去の実害を踏まえて、ハザードマップを真剣に見て確認したり、洪水災害の詳細を改めて理解したり、自分と家族の具体的な避難行動を考えました。(南中)

広がる 防災教育



見附市ではこれまでも、学校と家庭、地域の連携を強化し、地域の人材と資源を活かして教育の質の向上を図る「共創郷育」の理念のもとで、大人が総がかりで子どもの育ちを支える取組を推進してきました。

2024年4月、「見附市こども・子育てどまんなか条例」を施行しました。市民全員が子育てへの関心をさらに高め、こども・子育てを社会の「どまんなか」におきながら、保護者、行政はもとより、地域、事業者等社会全体でこどもや子育てを支え、こどもが「見附市に育ってよかった」と誇りを持ち、子育て世代が「見附市に住みたい、住んでよかった」と思えるまちの実現を目指しています。

本資料に紹介した市立学校の防災教育も、学校・家庭・地域が一体となり総がかりで取り組んだ成果が表れています。こうした成果を上げていただいたことに改めて感謝申し上げます。

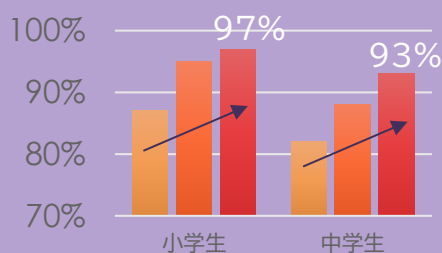
2024年度見附市共通アンケートから

	小学生	中学生
自分の学校のことが好きですか。Yes	90%	90%
人の役に立つ人間になりたいと思いますか。Yes	93%	94%
難しいことでも失敗を恐れずに挑戦していますか。(小3以上)Yes	87%	78%
学級みんなで協力してやり遂げ嬉しかったことはありますか。(小3以上)Yes	93%	93%

災害時に地域のために自分のできることをボランティアとして行いますか。(中学生のみ)

積極的にする。	29%	92%
頼まれたらする。	63%	
しないと思う。	8%	

住む地域や見附のことが好き!



2004 2014 2024
(7.13豪雨災害)

課題

形骸化を防ぎ真正なる学びに

教職員の異動

財政的支援の継続

発信と更なる協働

